谷村江　天和三癸亥八ノ廿二、九ノ七歸御禮　小出下野守

〔幕朝年中行事歌合上〕十六番　右　茶壺

木の芽つむ里の手振も語れ人宇治のわたりに往返りつゝ

茶壺と申は、數寄屋の頭に茶つぼをもたせて、宇治にのぼせ、新茶をくだしめらるゝもとは徒頭をそへられしが、今は大番の士是に添へり、壺の口開かるゝ時は、數寄屋のかしら茶を點じ、宿老少老の人々是を試し後、御宮みたまやにも供せらる、

茶師

〔柳營新編年中行事二月〕一宇治の茶被召上次第、上林家之起り、其外茶師家々の名付幷茶之銘、

一上林越前政重は、幼名又市といふ、本國丹波、生國は山城にて、三州岡崎に至り神君に奉仕、爲土呂郷奉行、土呂郷に松平甚介と云人あり、此近邊に越前屋敷有、遠州味方が原より相州小田原陣迄數度功勞あり、尾州長久手陣之時、森武藏守が騎兵二人を討取故、感狀幷御鎗賜る、神君秀吉公と御和談にて、茶屋四郎次郎宅御坐之時、依嚴命越前侯御側植村五郎、渡邊半藏共由緒有之故、兩人江嚴命に而、岡崎町奉行となる、其後上方爲案内、第一大坂城中、西國大名行跡、以日記注進可申、幷御茶仕立上べき旨にて宇治に被遣、竹庵に改メ、秀吉公薨後、井伊兵部少輔指圖にて一騎物見に出る、此時榊原式部康政江州勢田ゟ馬を早め伏見に著、亂髪にて御前江被出候時、竹庵物見より歸り委細言上、依之康政同席に而、御手づから御熨斗、又御印籠之息命丹を竹庵に賜り、馬にかひ候へと也、慶長五年、關東御下向之時、我等式御留守には如何可仕やと伺ひ候へば、鳥居彦右衞門申合候へと台命に依て、騎士十三人、雜兵百三十貳人にて、伏見之城に籠り、大鼓の丸を堅め、采幣を持、赤根染之鉢卷にて下知、粉骨を盡申討死す、今に上林が赤手拭と云傳ふる也、竹庵が子三人、兄は林藤四郎養子に成る、元和元年五月七日、高木主水手にて討死、二男林伊賀守は秀康卿に仕へ奉る、秀康卿逝去之時殉死、三男又市竹庵家相續也、竹庵討死之時幼少ゆへ、高野山中性院に蟄居、關東亂後被召出、板倉